
三人目のルーク・フォン・ファブレ

シグザウィル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人目のルーク・フォン・ファブレ

【Nコード】

N8102Y

【作者名】

シグザウイル

【あらすじ】

ヴァンとの決着後、平和は訪れたと思った矢先、ルーク達にまたもや危機が訪れる。

新しい旅の準備（前書き）

初めてなんで変かも

新しい旅の準備

ヴァンを倒してから三年・・・
再び平和が訪れてルーク達はのんびり過ごしていた。

ルーク「ふああああ、ヒマだな」

ルークは大きくあくびした

ガイ「ははは、相変わらずだな」

ルーク「しょうがねーだろ、ホントなんだからよ。あーあ、なんか
おもしれーことねーかな」

ガイ「そうだな、剣術でもやるか？」

ルーク「えーまたかよ!？」

ガイ「じゃあどうするんだよ？世界でもまわるか？」

ルーク「しゃーねえな、散歩がてらに皆に会いに行くか」

そういうと二人が出掛けようとしたら

ナタリア「あら、二人してどちらえ？」

ガイ「ちよつと散歩へ」

ナタリア「なら私も」

ルーク「王姫としての務めはどーすんだよ」

ナタリア「たまには気晴らしも必要ですわ」

ルーク「そうかい」

そういつて三人は行った

ティア「あら、いらっしやい」

ルーク「よお」

ティア「ちょうどよかったわ、話があるの」

ガイ「話？」

そういつとティアは一冊の本をとりだした

ティア「これは部屋を掃除していたらでてきたの、一通り見たけど
以外なことがわかったわ」

ルーク「なんだよ、以外なことって」

めんどうなことだと思っっている素振りをみせるルークだが実は少し
ワクワク感を抱いている

ティア「この本はレプリカ研究のものなの。ルークと関係している
んじゃないかと思っただけ的中したわ、どうやらこの本は「もう一
人の失敗作が記されているわ」

ルーク「・・・」

ティア「ごめんなさい！気に障るようなこと言って！」

ティアが気まずそうに言った

ルーク「いや・・・いいよ」

ティア「そう・・・わたしはその研究所に行ってみただけだなにもなかったわ、おそらくもう消えてしまったかあるいは・・・」

ガイ「そのもう一人の失敗作つてのがいるならあってみたいね」

ルーク「（もう一人の失敗作・・・）、ジェイド達にも伝えよう」

そういうとジェイドのもとへ向かった

ジェイド「おや、皆さんどうしました？」

ルーク「ジェイド！これをみてくれ！」

そういわれて本を見る

ジェイド「これは・・・」

ジェイドは難しい顔をする

ジェイド「興味がわいてきましたよ」

ジェイドは笑っている

ジェイド「早速探しましょうか。そうそうアニスもでしたね」

そういうとダアトへ向かった

アニス「あれ〜？みんなそろってどうしたの？」

ジェイド「旅をするんですよ」

アニス「え〜またなにかおきたの〜？」

ジェイド「いえ、あるものを探しに行くんですよ」

アニス「え〜なになに？」

アニスはウキウキしてた

ジェイド「秘密です」

アニス「ぶ〜」

アニスは頬をふくりました

ナタリア「みんなそろったことですし出発しましょう」

そして新しい旅が始まった

新しい旅の準備（後書き）

お気に召されるといいです

三人目のルーク搜索？（前書き）

やっと出来ました

三人目のルーク搜索？

旅の準備ができたルーク達は三人目のルークをさがすべく世界をまわることにした

ガイ「にしてもどうやって探す？」

ルーク「親父に聞いてみれば？なんか知ってそうだし」

そういうとバチカルへ向かった

ファブレ公爵「三人目のルーク？さあ？」

ティア「そうですか」

ルーク「だめか・・・ピオニー皇帝のどこにいくか」

ピオニー皇帝「三人目のルーク？さあな、聞いたことねえな」

ガイ「そうですか」

ピオニー皇帝「そうだお前らついでだがブウサギの散歩でもないか？」

ルテジアガナ「・・・」

ピオニー皇帝「冗談だよ」

ルーク「ここもだめか」

ジェイド「スピノザに聞いてみましょう」

ルーク「そうか、あいつ禁忌に手をだしてんだっけな」

スピノザ「三人目のルーク？わしは知らん」

ジェイド「！」

ジェイドがなにかを察した

ジェイド「いけませんね、嘘については」

スピノザ「な、何を言うか！わしは嘘をついておらん！」

ジェイド「顔があせてますよ？」

スピノザ「・・・！」

ジェイドは見抜いていた

スピノザ「・・・ついてこい」

そういうとスピノザは見知らぬ部屋に連れてきた

ルーク「ここは・・・」

スピノザ「ここはわしとヴァンが極秘に研究していた施設だ、そのため誰にも気づかれずにやる必要があった」

その研究施設はかなり広く巨大な機械があつた

ルーク「これって・・・」

ガイ「ああ、コーラル城にあつたやつだ。なぜここに？」

スピノザ「これはヴァンが極秘に制作した失敗作がつくれる機械だ」

ティア「なぜ失敗作をつくる機械を？」

スピノザ「ヴァンはそれを教えてくれなかった・・・」

アニス「その三人目のルークの行方は知らないの？」

スピノザ「知らぬ」

ナタリア「なら名前ぐらいは・・・」

スピノザ「残念だが知らぬ、姿すら見たことない」

残念な結果に皆が落ち込む
すると

ジェイド「・・・！誰か来ます」

ルーク「隠れよう！」

そついうと皆は物陰に隠れた

「???」

ルーク「（誰だ？この研究員じゃないな）」

ティア「（そうみたいね）」

???「ここか、あいつが生まれたって場所は・・・」

ガイ「（あいつ？もしかして三人目のルークのことか）」

???「なるほどよくできてるな」

そういうと男は出ていった

ナタリア「あの方がおっしゃってたあいつって・・・」

ティア「三人目のルークのことでしょうね」

アニス「でもでもなんであいつが三人目のルークのこと知ってるの
く？親なのかな？」

ジェイド「そのようですね」

ルーク「追いかけてよう！」

急いで追いかけたがもうすでにいなかった

ガイ「誰かが見てるはずだ、聞いてみよう」

そういうと手分けして聞いていったが誰も見てないそうだった

ルーク「くっそー、なんで誰も見てねーんだよ!？」

ティア「いったいどうやって」

ジェイド「考えても仕方ありません、探しに行きましょう」

そう言ってルーク達は歩み始めた

三人目のルーク搜索？（後書き）

結構いい感じです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102y/>

三人目のルーク・フォン・ファブレ

2011年11月24日22時55分発行